the SOLIST

SPECIAL INTERVIEW & MUST-SEE SIGHT

Interview&Text／東端哲也

最小の規模にして、壮大なスケールの演奏。

三舩優子と堀越彰によるユニット、OBSESSION（オブセッション）が碧南市芸術文化ホール・エメラルドホールに初登場。バーンスタインやガーシュウィンなど、オーケストラのために書かれたジャズの香り漂う名曲も披露。

── OBSESSIONを結成して、もう4年になるそうですね。

三舩:クラシック楽曲のロック風やジャズ風なアレンジは沢山ありますが、私たちの場合は限りなく譜面に忠実。単なる編曲ではなく世界観を広げることを目指して来ました。作曲家が楽譜に込めた意図をそのまま音にして行く姿勢は4年前から全くぶれていません。

堀越:楽曲が本来持っている魅力を損なわず、リズムはよりリズミックに、そこから解き放たれて流れるメロディはより美しくメロディックに。クラシックの最もクラシックらしい部分を表現したいという気持ちでやって来ました。

── 性質の異なる楽器がお互いにどのように影響し合うのですか?

三舩:ピアノは鍵盤楽器であると同時に打楽器。様々なスタイルの曲があるので、リズムを乗せやすかったり、逆にリズムのないところにあえてドラムのリズムを入れ込んだりすることで新鮮な響きとなるところが、この組合せの面白いところだと思っています。幼少期をアメリカで過ごし、あらゆるジャンルの音楽をボーダーレスに聴きながら育ったので、リズムに関しては多面的な馴染みはあると思います。

堀越:そもそも二人ともが同じような感覚の持ち主なんです。ドラムはもちろんリズム楽器ですが、空間を彩ることや時間軸を変化させることが出来る。シンバルは弦楽、フロアタムはティンパニーやコントラバスと置き換えることも出来ますし、風が吹いたり大地が揺れたり、落雷の衝撃、悲しみや祈りをイメージさせることも出来ます。大切なことは二人の役割を限定せず、交差したり入れ替わったりすることだと思います。

── 例えば今回のプログラムのひとつである、ラヴェルの〈道化師の朝の歌〉のようなピアノ曲をこのユニットで演奏した時の聴き処を教えて下さい。

三舩:もともとピアノ・ソロで弾くだけでもかなり難易度の高い曲ですので、変則的なリズム、間合い、ルバートなど、アンサンブルとして演奏するのは更に難しい。一人で弾いていても、ピアノの調子や会場の大きさ、その日の自分のコンディション次第でかなり違う演奏になってしまいます。でもそこが堀越さんの素晴らしいところで、私の音や呼吸、心情に至るまで、どんな小さなことでも瞬時に受け止めてくれるので、結果として全体のイメージや仕上がりが変わることがない。1+1が必ず2かそれ以上になり、ダイナミックな楽曲に生まれ変わるのです。

堀越:シチェドリンやヒナステラのピアノ曲もそうですが〈道化師の朝の歌〉もとても繊細で難しい曲です。リズムが立ち上がり、解放され、ダイナミクスが変化する。それが何度も繰り返されるクライマックスは最大の聴き処ではないでしょうか。特にラヴェル独特の色彩感をどう表現するか、これも僕にとっては大きな挑戦ですね。

── バーンスタインの〈不安の時代〉やガーシュウィンの〈ラプソディー・イン・ブルー〉のようなジャズとクラシックを越境し合う作品の時はいかがですか?

三舩:私の中ではバーンスタインもガーシュウィンもクラシックの作曲家として捉えています。これらの楽曲にはもちろんジャズ的な要素も沢山ありますが、技巧的にもクラシックの訓練をして来ないと難しいパッセージが多々ある。それに即興演奏をするわけではありませんしね。オリジナル版では多い時で100人近くのオーケストラが相手なので、それぞれの楽器の音の出方の特徴やタイミング、絡んでいる楽器によって音量や音質を考えるなど、ソリストでありながら全体的なアンサンブルを常に意識しなければなりませんが、ドラムと二人ならとてもコンパクトで密な音作りが出来るので、より自分のアイディアや表現をストレートに出せる気がします。特に〈ラプソディー・イン・ブルー〉はアメリカを象徴する曲のひとつで、中間部のゆったりした美しい旋律を弾いている時はマンハッタンの摩天楼のことしか思い浮かびません。

堀越:既にジャズ的なフィールやグルーヴを意識して作られている曲に関しては、一段と注意深く考えています。即興的になり過ぎず、全てをジャズの手法に変換するのではなく、その時代にアメリカという風土で産まれた、あくまでもクラシック作品だと捉えています。ドラム本来の生命力や躍動感を生み出すことはもちろん、ドラムの範疇を超え、時には静寂や不安、希望や歓喜までも表現することを目指したい。それにしても〈ラプソディー・イン・ブルー〉は本当に素晴らしい曲ですよね。黒人と白人、米国と欧州、あらゆるカルチャーがクロスする本当にパワフルな曲。24歳の僕を見出してくれたジャズ・ピアニストの山下洋輔さんの十八番でもありますから、僕にとっても特別な曲です。

── 最後にお二人の演奏を楽しみにしている皆さんにメッセージをお願いいたします。

三舩:またエメラルドホール演奏できるのが嬉しく、とても楽しみにしています。OBSESSIONという革新的なジャンルの音楽に、文字通り是非「取り憑かれ」て下さい!

堀越:当日は楽しい時間になるようにお話を交えながら進めて行きたいと考えています。偉大なる作曲家が残した名曲と対峙する喜びを、皆さまと共有できれば嬉しいです。

10/13 SATURDAY【チケット発売中】
碧南市制70周年 碧南市芸術文化ホール25周年記念事業
「三舩優子×堀越彰 OBSESSIONコンサート」

■会場／碧南市芸術文化ホール エメラルドホール
■開演／14:00
■料金(税込)／全席自由 一般¥2,500(当日¥3,000)
学生¥1,000(当日¥1,500)
■お問合せ／碧南市芸術文化ホール TEL.0566-46-3731
※未就学児入場不可

OBSESSION

三舩優子(ピアノ)×堀越彰(ドラムス)

オススメ! POINT!
性質の異なる楽器の組合せだが、目指す音楽の方向性は同じ!